

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 21GH102 第 号

氏 名

人文社会科学専攻（コース：文化芸術）

佐藤真紀乃

論文題目

音楽科教育における「技能」に焦点を当てた評価の在り方

本論文は、「技能」における評価に焦点を当て、量的評価と質的評価をキーワードに、音楽科教育の評価の価値やこれからの評価の在り方、そこから考えられる今後の音楽をどのような視点で認識すべきなのかということについて文献調査を方法論として分析するとともに、今後の評価の在り方について提案することを目的としている。

これまでの評価は、客観性や見えやすい学力に評価が偏ること等が問題視されると同時に、そのための評価の工夫や指導方法などが提案され、音楽科の評価はなくてはならないものであると認識されてきた。したがって、子どもが創り上げた音楽を教員が評価することについては大きく疑問視されてこなかったと考えられる。音楽科の目指す資質能力とは、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる」（2019, p.9）ことであり、子どもたちが有名な演奏家や作曲家になることを目指すものではない。しかしながら、教員は子どもの限定された「音楽的」能力を今日まで評価し続けていることが現状であると考えられる。このような背景から導き出される本研究のresearch questionsは以下の通りである。1) これまでの音楽科教育の評価はどのようなものか。2) 今後の評価はどうあるべきか。

大友（2014）は、授業の中で人前で一人で歌う経験や、音程やリズムのズレ、音や声の大きさ等を指導されたことが音楽の授業に苦手意識を持った要因として挙げている。学校教育におけるこれらの音楽活動を若尾（2014）は、大人が考える「子どものあるべき姿」だと指摘し、大人が子どもに対して望む音楽のことを「子ども用の音楽」と呼んでいる。また、学習指導要領では、評価の観点は「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」と示されており、これは若尾の指摘する「子どものあるべき姿」及び「子ども用の音楽」の達成を示すものと考えられる。子どもは、自分がやりたいものよりも、大人が喜ぶものを選択し自分がどのように位置付けられているかを考えながら行動する（大友, 2014）。その結果、子どもは自分の位置付けやこれに対する評価への不安から、大人の顔色を窺った音楽をするようになった。これらを踏まえ、大人が「子どものあるべき姿」を押し付けてきたこと、そして、それを評価することによって子どもを格付けしてきたことが指摘できる。さらに、アトキン（文部省, 1975）によって、「工学的接近」と「羅生門的接近」という2つのアプローチと、これに伴う評価方法が提示された。工学的評価は、客観性が求められる故に、測定的で数量化された評価であり、対照的に羅生門的評価は、主観的で常識的な記述を重視した評価を指し、多面的観察によるあらゆる事象が評価対象となる。文部省では、これらの手法が相互に補い合うことが望ましいと指摘しているが、現在は観点別評価に則り、工学的評価が全体の割合を占めている。以上を踏まえ本論文は、1) これまでの音楽科の評価は数値的な点数化による量的評価であり、教師を主体とした評価が行われており、2) 音楽科における今後の評価は、数値的ではない、子どもを主体とした質的評価が望ましい、と結論付けた。

今後の課題として、質的な評価と成績の結びつけ方、さらに、質的評価をどのように音楽科教育に取り入れるのかということが挙げられる。